

原田彰著

『差別・被差別を超える人権教育 -同和教育の授業実践記録を読み解く』

(明石書房 2015 年)

高 橋 靖 幸

本書は、四国にある T 県 I 町立 I 中学校で、M 先生という人物とかれの担任するクラスの生徒たちの中で展開された「同和教育」の授業実践の記録をテキストとして、「部落問題」の学習における教師生徒関係ならびに生徒間関係の生成と変化をとらえることを試みるものである（11 頁）。こうした本書のねらいの背景には、同和対策についての国の法律が失効した現在、「同和教育とは、何だったのか？」を改めて顧みて今日の人権教育を考える必要があるのではないかという著者の思いが込められている（13 頁）。本書の特徴は、何と言ってもその膨大かつ詳細な授業実践記録資料の扱いにある。その記録は、教師と生徒たちの生き生きとした数多くの発言（言葉）によってまとめられている。そうした貴重な記録が当事者である教師自身の自分史や経験論として扱われるのではなく、研究という立場から（当事者たちの声に寄り添いながらも）客観的な分析と考察が加えられているところに本書の意義があると言えるだろう。

本書は、序章の「問題の設定」から始まり、5つの章からなる詳細な実践記録の分析を経て、終章の「考察」をもって結ばれるというように、全体で7つの章から構成されている。序章における問題設定では、1990年度から1991年度にかけて、M先生とその担任学級の生徒たちによって取り組まれた実際の「同和教育」の「実践記録」の解読を通じて、「部落問題学習」による教師生徒関係と生徒間関係の変化と成長を読み解くという本書のねらいが提示される。また本書は、それら教師や生徒たちの関係の変化と成長を「相互の違いを違いとして踏まえながら共通の課題を見出していく『呼びかけ（訴え）-応答』の

関係性」(21 頁)の構築のなかに見いだすことができると指摘する。序章の段階で、この「呼びかけ-応答」の関係性という視点については特に詳細な説明はなく、その内実を十分に知ることはまだできない。しかしながら私たち読者は、序章のこの言葉の通り、その後の各章の実践記録の分析のなかで、このような視点からの教師生徒関係ならびに生徒間関係の変化の実際をはっきりと見ることになる。特に、授業において生徒たち自身が生み出す発言の積み重ねによって、「生徒間関係の変化=『呼びかけ(訴え)-応答』の関係性の実現」が実際に生じていく様子には、おそらく驚かされることとなるだろう。序章では、本書を読み進める道筋として、この「呼びかけ(訴え)-応答」の関係性という視点の重要性がまずは提示されるのである。

そしてこうした序章の問題設定に答えていくために、以下で5つの章が展開される。まず第1章ではM先生自身のライフ・ストーリーと、そのライフ・ストーリーの内実をより深く理解するため、ある女子大学生のライフ・ストーリーが紹介される。M先生と女子大学生はまったく面識をもたない間柄であるが、ふたりに共通するのは、ともに「部落」と呼ばれる地域の出身者であるという点であった。ふたりのライフ・ストーリーからは、「被差別部落出身者」がその出自について様々な葛藤を抱えながら青年期に至るまでの長い時間を送る様子がありありと伝わってくる。そのことは特に、ふたりがその自らの抱える問題を「卑屈」という言葉で共通して表現している点に読み取ることができる。特段面識をもたないふたりが、「卑屈」という同じ言葉で自らの生まれや境遇を表現するところに、「部落問題」の本質の一部を私たち読者は理解することになるだろう。M先生は、幼少期から青年期に至り教育の職に就くまでの自分自身の姿を「卑屈」という表現で言い表した。本書の第1章では、その後「卑屈」からの解放を求めて中学校教師として「同和教育」に取り組んでいくことになるM先生の熱い想いの背景を読者は知ることとなる。

続く第2章では、M先生のクラスの中で「呼びかけ-応答」の関係性が形成されていく授業の「実践記録」が具体的に読み解かれていく。対象となる記録は「全体学習」と呼ばれる部落問題学習であり、それは同学年の他学級の生徒たちに向けて開かれる形で行われる公開授業型の授業実践の記録であった。本書で扱われる実践記録は、全体学習が開始された1990年度からその翌年の

1991年度までのものである。重要な点は、クラスの中には「部落地区」出身の生徒が複数人おり、彼らが授業の中で自らの出自を名乗ったり、様々な発言を行ったりするところにあると本書は指摘する。加えて、そうした彼らの発言のみならず、「部落地区」の出身ではない他の生徒たちもまた多くの発言を行い、クラス全体で発言の応酬や連続が生まれる全体学習の姿に本書は注目している。ひとりの生徒が発言し、その発言に対して他の多くの生徒たちが自分の意見を重ねていく。そしてM先生自身もそうした生徒たちに対して積極的な関わりをもっていく。本書は、実践記録から読み解くことのできるこうした教師と生徒たちの発言の連続を「呼びかけ-応答」の関係性として着目し、こうした関係性がかげらの発言の連なりの中で作られていくことで、クラスの中に部落出身か部落出身でないかという各々の社会的立場を絶対化せずに、「差別」という同じ課題に向かう仲間集団が形成されていくと指摘している。実践記録には、差別・被差別の両側から問題を乗り越えて対話しようとする生徒たちの姿が見られ、また学習が進むにつれてそのクラスのうねりのような大きな変化がより明確なものとなっていくことが本書の分析からは明らかとなる。第2章は、本書の中でもっとも紙面の割かれた章であり、数多くの実践記録のデータが詳細に読み解かれている。この第2章の念密なデータの解読によって、M先生のクラスの変化の過程はよりリアルに私たち読者に伝わってくるのである。

さらに第3章では、生徒個人々の意識の変化に焦点を向けるべく、授業の中での生徒それぞれの発言の内容や授業前後の感想の時系列的な変化について分析が行われる。対象とされたのは、クラス37名のうちの12名、またその内訳についても授業で被差別部落出身と名乗った生徒5名、部落出身とは名乗っていない生徒7名と、非常に数多くの生徒たちであった。本書の分析からは、生徒たちが同じ内容の授業を受けながら、一人ひとりが抱える問題はそれぞれ異なり、またその変化の過程もそれぞれであることがわかる。しかしながら同時に、一人ひとりの生徒は、この部落問題学習の授業を通じて、自らが真摯な発言者（「呼びかけ」の主体）となり、また他者の発言（「呼びかけ」）に対して自らの意見を表明する責任のある者（「応答」の主体）となるという共通した課題意識をもっていることが明らかになる。本書は、自らが「呼びかけ」と

「応答」の主体とならなければならないという課題に対峙してそれぞれに格闘する生徒たちの様子を描写し、またこうした生徒たち一人ひとりの意識と実際の取り組みの結果により、クラスの中で「呼びかけ」と「応答」の関係性が作り出されていくことを丁寧に追っている。こうした〈対話〉の関係性が生まれる中で、生徒たちは部落出身か部落出身でないかの問題に囚われずに、「差別」に関して自分たちの取り組むべき共通の問題について議論することが可能となっていると本書は指摘する。この第3章では、「呼びかけ-応答」の関係性の姿がこのような具体的な分析によってより明解に提起されるのである。

次いで第4章では、全体学習の中で使用される「学習資料」に焦点が当てられている。興味深いのは、本書が単に授業で使用される学習資料を紹介するという立場にあるのではなく、教師と生徒の関係ならびに生徒間の関係を媒介するものとして学習資料を位置付ける立場にあるという点である。本書は、哲学者ミハイル・バフチンに依拠して、全体学習で紡ぎ出される一連の「発言(言葉)」が、話し手、聞き手、そして話題となっている対象という三者の社会的な相互作用の所産であることを指摘し、そのうえで前章までで確認された教師と生徒たちの「呼びかけ」と「応答」の関係性に、さらに「学習資料」の視点を重ねる形で解説を試みているのである。しかもこの「学習資料」は単なる事物としてばかりでなく「人物」としてもとらえられる。資料の中の「人物」と生徒たちとの間でさまざまな対話が行われることで、生徒たちの「わたし」は確立され、かれらの中から自分たち自身の「発言(言葉)」が生み出されるとの理解を本書は提示している。第4章の分析からは、生徒たちが「呼びかけ」と「応答」の関係性を「学習資料」の媒介を通じて(すなわち「学習資料」の「人物」との対話のなかで)いかにして作り出しているのかが明らかにされるのであった。

本書は、第2章、第3章、第4章で、全体学習を通じた「呼びかけ-応答」の関係性の実現、そしてその関係性を生徒個人々の意識の変化ならびに学習資料の媒介という視点から読み解くことを行ってくれている。これらを受けて第5章では、部落地区出身のあるひとりの生徒の発言に着目した分析、ならびに全体学習の中で数々に生じた家族に関する生徒たちの発言を取り上げた分析という、ふたつの補足的なデータの解説が試みられるのである。家族に関する

生徒たちの発言については、学校という枠組みを超えたときにかれらを待ち迎える現実的な問題として重要な位置付けとなっていることが伝わってくる。特に、部落地区の出身ではない生徒たちにとって、部落問題について家族と正面から向き合うことは相当の準備と覚悟が必要であることが本書の分析からはわかる。しかしながら、そうした準備と覚悟をしっかりとつために、生徒たちは学校での全体学習を大切に、学びを深めようとする姿勢でいることが伝わるのである。

こうした各章の分析の後に、終章では全体的な考察が行われる。本書は、一貫して「呼びかけ（訴え）」と「応答」の関係性の展開のなかに、教師生徒関係ならびに生徒間関係の生成と変化を見ていた。終章では、その重要性と教育の可能性について、今日の人権教育の潮流を考えるとという視点から考察が加えられている。本書が訴えるのは、M先生と生徒たちの間で展開された全体学習の「呼びかけ-応答」の関係性の実現には、差別の問題に対して差別・被差別の両側から超えようとする取り組みがみられるというものであった。部落地区出身かそうでないかという社会的な立場を絶対化せずに、クラス全員がそれぞれの道を辿りながら差別の問題に両側から迫り、同一の課題意識（互いに支え合いながら「峠」を超えていくこと）に到達しようとする取り組みが、「呼びかけ-応答」の関係性の中で試みられていたことであったのではないかと本書は指摘する。こうしたM先生と生徒たちの授業実践は、今日の人権教育の潮流（その課題を含めて）をすでに先取りした取り組みであることが終章全体の考察からは伝わるのである。

最後に、本書全体を精読して、叶わぬ願いと自覚しながらも僭越ながら評者の要望を記させていただきたい。それは、本書でも最後に言及されている通り、中学校時代にM先生のもとでこうした熱い授業を経験したこの「生徒たちが、二十五年後の『今』をどう生きているか」（347頁）を心の底から知りたいということである。ひとりの生徒については結婚のエピソードが紹介されているが、それ以外の生徒たちについても中学を卒業した後、どのような成長を遂げ、あるいはどのような問題を経験したのかがたいへん気になる。こうした点は本書の直接の課題からは外れた関心であり、的を射ない要望であることだろう。しかしこうした思いが生じるのも、一重に本書で提示された中学生たちの授業

実践の記録の奥深さとその分析の面白さに起因している。「差別」や「人権教育」というと、そのことを専門に学んでこなかった者にとってはもしかすると気後れすることもあるかもしれない。しかし学校における実際の学びの姿を知ることからこれらの問題を考え始めることは効果的であるし、その意味で本書は人権教育を学ぶ入門書としてもたいへん適切な書であると言えるだろう。